

応用地形判読士の試験結果の感想

平成 25 年度の応用地形判読士二次試験の結果が発表された。合格者は 12 名で、昨年度の合格者と合わせて 29 名の応用地形判読士が誕生した。

いくつか気が付いたことを列挙する。

(1) 北海道で応用地形判読士がようやく 1 名誕生した。

道内での今年度の応用地形判読士受験資格者は 4 名であったので、合格率は 25% ということになる。しかし、この資格が実際の業務で活用されるためには、少なくとも 2 桁人数の判読士が必要であろう。

(2) まだまだ、合格者は少ない。

全国で見ると今年度合格者の 12 名うち 9 名(75%)が、昨年度の応用地形マスターI 級合格者である。今年度の合格者は 3 名ということになる。今年度の応用地形マスターI 級合格者は 35 名であるから、合格率は 9% という狭き門である。

2013 年度応用地形判読士合格者数

受験地	合格者数 (うち 2012 年度一次試験合格者)
札幌	1 (1)
仙台	2 (1)
新潟	1 (1)
東京	5 (3)
名古屋	2 (2)
大坂	0
広島	0
高松	1 (1)
福岡	0
沖縄	0
合計	12 (9)

(3) 2012 年度に応用地形判読士補となった人は、再来年度が最後の挑戦となる。

全地連ウェブサイトには、二次試験の過去問題が掲載されていて 2012 年度試験の判定のポイントも掲載されている。今年度の合格者の動向をみると、過去問題を解くことが有効と思われる。

(4) 出題形式がほぼ固まった。

この 2 年間の出題を見ると、地形判読・地形分類を行って地形発達史を編み、その地域で発生しやすい自然災害について述べるというものである。基本的には 2 万 5 千分の 1 地形図で地形判読を行い、補助手段として空中写真判読を用いるということになるだろう。

(5) 業務の中でも地形判読訓練が必要である。

日常業務で実施調査計画書を作成する時に、業務対象地域を含めた周辺の地形判読・空中写真判読を習慣

づけることで、無理なく地形判読士としての力量をつけることができるような気がする。何よりも、現場が始まれば判読結果を検証できるのが強みである。その積み重ねによって、事業の手戻りを減らすことができれば、この資格の意義が生きてくると思う。

(2014年3月4日 石井 正之)